

児童期の発達課題についての教育心理学的考察（Ⅰ）

—大学教員が兼務した附属小学校校長からの提言—

假屋園昭彦¹

(2022 年 11 月 16 日 受理)

Educational Psychological Study on Developmental Task in Childhood.

—Perspective of the Principal of an Elementary School Attached to Kagoshima University—

KARIYAZONO Akihiko

要約

筆者は、鹿児島大学大学院教育学研究科の教員（教授）であり、同時に平成 29 年度（2017 年度）から鹿児島大学教育学部附属小学校校長を兼務している。筆者の研究者としての専門分野は、教育心理学および道徳教育である。本稿は、筆者が研究者の立場から、同時に校長として附属小学校で行った卒業式の式辞および委員会、職員会議での指導助言、配布資料、九州附属連盟国語部会での挨拶を整理した内容である。この内容は、附属小の先生方、児童、そして保護者に考えてもらいたいメッセージである。それぞれのメッセージは、心理学、哲学、倫理学の理論を学校教育に当てはめて考察した内容になっている。

キーワード：価値の物差し・学びの意味と進路選択・心と行動・功利主義と義務論・偶然と必然

問題と目的

I. はじめに

筆者は、鹿児島大学大学院教育学研究科の教員（教授）であり、同時に平成 29 年度（2017 年度）から鹿児島大学教育学部附属小学校校長を兼務している。本稿は、校長として附属小学校で行った卒業式での学校長式辞、職員会議での指導助言、職員への配布資料、九州附属学校連盟国語部会での挨拶を整理し、まとめた内容である。これらの内容は、教育心理学および道徳教育を専門とする筆者が、附属小学校での経験をもとに考察した内容であり、同時に児童および職員の方々へ送ったメッセージである。

¹ 鹿児島大学法文教育学域 教育学系 教授

それぞれのメッセージで土台になっているのは、心理学、哲学、倫理学の理論である。これらの理論に筆者の考えを加えながら、校長の立場として、教師、児童、保護者に考えてもらいたい内容そして伝えたい内容を作成した。

本稿の構成を以下に示す。

II. 卒業式式辞：平成 29 年度（2017 年度）から令和 3 年度（2021 年度）まで

III. 卒業文集：平成 29 年度（2017 年度）から令和 3 年度（2021 年度）まで

IV. 会議での指導助言：平成 3 年（2021 年）4 月以降（2021 年 3 月までの内容は、本論文シリーズのⅢに記載している。）

V. 令和元年度（2019 年度）公開研究会 全体論原案 平成 31 年（2019 年）3 月 15 日全職員に配布した資料

VI. 平成 30 年（2018 年）7 月 26 日 九州地区国立大学附属学校連盟 国語部会 開会挨拶

VII. 平成 29 年（2017 年）10 月 21 日 附属小学校 授業力アップ講座 道徳 指導助言

VIII. 文献について

II. 鹿児島大学教育学部附属小学校 卒業式式辞

平成 29 年（2017 年度）度から令和 3 年度（2021 年度）度まで

以下は筆者が、鹿児島大学教育学部附属小学校での卒業式において、卒業生およびその保護者に送った学校長式辞である。

1. 平成 29 年度（2017 年度） 2018 年 3 月 16 日

主題：学ぶということの意味、進路の選択

（1）学ぶということの意味

本日は、鹿児島大学教育学部附属小学校平成 29 年度第 67 回卒業式を挙行できますことを、心から感謝申し上げます。ただ今、卒業生 139 名に卒業証書を授与いたしました。卒業おめでとうございます。卒業生の皆さんは、これから中学、高校に進みます。そこでは、新しい学びと進路の選択が始まります。そこで学ぶということの意味と進路を選ぶことの意味を考えてみます。

何かを学ぶということは、単に新しい知識を頭の中に蓄えるということではありません。たとえば、分数がわかる前の自分と分数がわかった後の自分を比べてみましょう。何が変わっているでしょうか。自分が変わっていますね。分数を知らなかった自分から分数を知っている自分へと自分が変わっていくのです。このように学びという営みは自分が変わっていく過程です。学びをとおして私たちは、これからの自分を探し、なりたい自分になっていくことができます。これからの学びを通して、皆さんがどう変わっていくかをとても楽しみにしています。

また、学びにはいくつかの段階があります。学び始めの頃は、学びがおもしろくないかもしれません。学びの意味がわからないことがあるかもしれません。学びは山登りにたとえることができま

す。登っている最中は、周囲は林ばかりで空も見えませんね。今、自分がどのあたりなのかという実感をもつこともできないかもしれませんね。

山の頂上に立ってはじめて、自分がどの道を登ってきたのか、周囲がどんな風景なのか、周囲の中で自分がどういった位置にいるのかがわかります。

この例と同じように、学びの意味は、学び終わった時にはじめてわかってくるものです。最初はおもしろくないかもしれないし、学ぶ意味がわからないかもしれません。

しかし、学びにはそのおもしろさがわかるまで、あるいは学びの意味がわかるまで我慢する時期が必要です。

学び始めがおもしろくないからと言って、簡単に投げ出したり、食わず嫌いをすると、自分で自分の可能性を狭くしてしまうと思います。簡単に投げ出さず、おもしろさがわかるまで頑張ってみましょう。

（２）進路の選択

また、これから皆さんには、自分の進む道を決める進路選択も始まることでしょう。

進路の選択で迷うこともあるかもしれません。将来は何になろうか。学校の先生、お医者さん、建築士、どんな道を選ぼうか迷うかもしれません。どの道が自分にとっての正解なのか、迷うことがあるかもしれませんね。

ここで大切なことは、選ぶ時点で正解が決まっているわけではないということです。どの道を選ぶのが正解なのかは、選ぶ時点では誰にもわからないのです。周囲の人にも自分にもわかりません。大切なのは選んだ後です。選んだ道を自分で頑張って、自分で自分の選択を正解にしていくのです。自分の選択を正解にするのは自分です。

誰かが正解である道を教えてくれるわけではありません。正解である道が最初から準備されているわけではありません。自分の選択を自分で正解にするために、選んだ道を自分で頑張ってほしいと思います。

卒業生の皆さんのこれからの将来に期待して、式辞といたします。

2. 平成 30 年度（2018 年度） 2019 年 3 月 18 日

主題：心と行動、やる気、悩み方、行動と計画

本日は、鹿児島大学教育学部附属小学校平成 30 年度第 68 回卒業式を举行できますことを、心から感謝申し上げます。ただ今、卒業生 139 名に卒業証書を授与いたしました。卒業、おめでとうございます。

卒業生の皆さんは、これから中学に進み、新たな生活に入ります。そこで今日は、皆さんが中学生生活で直面するであろう二つの例を挙げながら、心と行動の関係についての話をしたいと思います。具体的には、心が先か、行動が先かという話をいたします。

二つの例として、やる気と悩みについて取り上げます。やる気も悩みも心の姿です。

最初の例はやる気です。皆さんも経験があると思いますが、やる気が出る時もあれば、やる気が出ない時もあります。この理由は、人の心は、脆くて、ムラがあって、変わりやすいからです。だからやる気も出たり、出なかったりするのです。

やる気と行動の間には、二種類の方向があります。一つはやる気を出して行動を起こすという方向です。これはやる気から行動への方向です。やる気を出してから勉強を始めるという場合は、やる気から行動の方向です。やる気が出ている時は、この方向で行動を起こすとよいでしょう。

二つ目は逆の方向です。それは行動からやる気という方向です。行動を始める時にはやる気なくても、行動を続けていくうちに次第にやる気が出てくるのです。したがって、行動を始める時にやる気があるかないかにこだわる必要はありません。やる気にこだわらずにまず動くことが大切です。動いているうちに次第にやる気が出てきます。やる気が出ない時は、この方向で動いてみてください。

勉強やクラブ活動の練習といった特定の行動を毎日続けないといけない時には、やる気にこだわると、安定して続けることができません。こんな時は、やる気は行動を始める前から出ている必要はなく、行動をするなかで出てくると考えましょう。すると毎日、特定の行動を安定して続けることができます。

次の例として挙げるのは、悩みです。中学生活では多くの悩みに出会うでしょう。悩むことはとても大切です。悩むことで心が成熟するからです。重要なことはいかに悩むか、という悩み方です。

悩む時は、何もしないで悩むだけという悩み方はよくないと考えます。何もしないで悩むのではなく、行動しながら悩みましょう。行動すると現実が変わります。現実が変わると気持ちも変わるのです。人の心は変わりやすいからです。

悩んでいるだけでは現実は変わりません。実際に行動することによってはじめて見えてくる現実がたくさんあります。

実際に動いて行動した時に強くなることができます。弱いから動けないのではなく、動かないから弱いままなのだと考えます。動けば必ず何かが変わります。動けば何かを変えることができます。

次に行動する時に重要になる点を述べます。行動を始める時にすべての条件がそろっていることはまずありません。たとえば、やれば必ず成功しそうで、練習場所や練習する時間もたくさんある。このような条件がそろわないと行動しない人は、結局、行動しないままです。行動を始める時にすべての条件がそろっていることにこだわる必要はありません。実際に行動することではじめて、工夫できるところや改善点が見えてきます。

次に計画についてです。行動する時には、あらかじめ計画を立てることでしょう。ここで大切なことは、計画通りに進むことにこだわる必要はないということです。実際にやってみると計画通りに進まないことはよくあります。計画通りに進まないからといってすぐに投げ出さないでください。計画通りに進まないのであれば、行動しながらその都度、計画を修正していけばよいのです。現実はその繰り返しです。完全さにこだわる必要はありません。不完全なものを重ねていけば、だんだ

ん完全に近づきます。最初から完全にできることはありません。

今日、附属小学校を巣立ち、四月から中学生になる君たちに、中学生生活をしっかりと乗り切ってもらいたいという気持ちを込めて、校長先生の最後の話として、心と行動の話をいたしました。君たちのこれからの将来に期待しています。以上で校長式辞といたします。

3. 令和元年度（2019年度） 2020年3月19日

主題：功利主義と義務論

本日は無事、令和元年度第69回卒業式を挙行できますことを心から嬉しく思います。145名の卒業生の皆さん、卒業、おめでとうございます。

今日は、卒業生の皆さんへの「はなむけ」の言葉として、哲学という学問の中で大切にされている二つの価値観である、功利主義と義務論の紹介をいたします。この二つの価値観は、私たちの日常の暮らしに深く関わっている価値観です。そして実は皆さんもこれまで、道德の授業を通して、これらの価値観について考えてきました。

この場で、私が功利主義と義務論の話をする目的は、これからの長い人生の中で、皆さんにはぜひ自分で自分を支える力を身に付けてほしいという気持ちからです。

最初に功利主義を紹介します。功利主義では次のように考えます。何かを頑張った結果として、よいことが起こって自分と周囲が幸せになった。自分の行動の結果、自分と周囲により結果が生まれてはじめて、自分がとった行動は意味をもつ。このように功利主義では、行動の結果、何らかのよさが生まれてはじめてその行動は意味をもつ、と考えます。たとえば次のような考え方です。「早起きをする、どんなよいことがありますか」「人に親切にすると、どんなよいことがありますか」といった問いかけは、功利主義に基づく問いかけです。行動の結果としての成果を求める考え方が功利主義です。私たちが努力するのは、努力の結果としてよいことが起こるようにするためです。したがって功利主義は、頑張る自分を支えるためのとても大切な価値観です。社会では成果が求められます。したがって社会は功利主義で動いていると言ってよいでしょう。

成果が求められるのが社会です。しかし、頑張ってもうまくいかないことが多いのも社会です。あるいは、成功しそうになくても取り組まねばならない仕事もたくさんあります。

頑張ってもよいことがなかった時、うまくいきそうにないことにも取り組まねばならない時に、気持ちを切らさず、自分を支えてくれる価値観が義務論です。

義務論からの問いかけは次のようになります。たとえば「失敗したら、行動した意味はないのですか」「結果としてよいことが起こらなかったら、行動した意味はないのですか」「失敗しそうだったら、行動しない方がよいのですか」。

現実には、「頑張ったけれどうまくいかなかった」「頑張ったけれど、よいことがなかった」というケースがたくさんあります。皆さんもこれまで経験があるかもしれませんね。

こうした問いかけに義務論では次のように答えます。「結果として、よいことはあってもなくても

どちらでもよい。結果を求めて行動したのではない。今、自分が置かれた立場で、自分の責任として、自分の使命として、やらねばならないことをやったのだ。そのこと自体に意味がある。今、自分がどんな環境や立場に置かれているかが重要なのではない。自分が置かれた環境や立場で、自分がやらねばならないことを、しっかりやったかどうか重要なのだ」。これが義務論の考え方です。

功利主義では、行動はよい結果を出すために行うと考えます。したがって、よい結果が出たか、出なかったかによって行動の意味が変わります。よい結果が出たのであれば、行動に意味があったことになるし、よい結果が出なかったのであれば、行動には意味がなかったことになります。これは結果が行動の意味を決めていることになります。自分がとった行動の意味が結果によって左右されてしまうことになります。

一方、義務論では、「自分の役割や責務から自分がとるべき行動をとった」と考えるので、結果によって自分がとった行動の意味が変わることはありません。行動の意味が結果によって左右されることはありません。

功利主義や義務論といった価値観は、物事を捉える規準になりえます。したがって、価値の物差しと呼ぶことができるでしょう。

皆さんに知っていてほしいことは、功利主義と義務論の「どちらが正しいのか」ということではありません。世の中には「功利主義だけではなく義務論という価値の物差しがある」ということをぜひ知っておいてください。もし皆さんがもっている価値の物差しが功利主義だけだった場合、「頑張ったけれど、うまくいかなかった自分」を支えることができません。しかし、義務論という価値の物差しをもっていれば、「頑張ったけれどうまくいかなかった自分」を支えることができます。自分ももっている価値の物差しが自分を支えてくれるのです。

一つの価値観だけにしがみついた生き方をしていると、その価値観が通用しない場面に出会った時に、もちこたえられなくなります。しかし、多くの価値観を自分の中にもっていれば、どんな場面に出会っても、どんな境遇に置かれていても、自分の価値観で自分を支えることができます。大切なことは、自分で自分を支えるための価値観をたくさんもっておくことです。これが価値観の役割です。

皆さんには、これからの勉強を通して、世の中にある多くの価値の物差しを学んでほしいと思います。そしてこれからの長い人生の中で、生きづらさを感じた時、思うようにいかなかった時、自分を支えてくれるのは、自分ももっている価値の物差しであることを知ってほしいと思います。

これから長い人生を送る皆さんに、自分で自分を支える力を身に付けてほしいという気持ちを込めて、功利主義と義務論という二つの価値の物差しについての話をいたしました。以上で校長式辞といたします。

4. 令和2年度(2020年度) 2021年3月18日

主題：目標の種類

本日、鹿児島大学教育学部附属小学校令和2年度第70回卒業式を挙行できますことを心から嬉しく思います。そして只今、卒業生143名に卒業証書を授与いたしました。卒業、おめでとうございます。保護者の皆さまにおかれましては、お子様のご卒業を心からお喜び申し上げます。

今年度は、これまで実施されてきた多くの学校行事が中止や変更になりました。そのため皆さんにとっては、何を目指したらよいのかわからなくなったり、目標を見つけることが難しくなったりしたことも多かったと思います。これからの社会は、変化が激しく、価値観が多様化することが予想されます。したがって皆さんは今後、今年度のように、目指す方向に迷ったり、目標を見つけにくくなったりする事態に出会うことは十分考えられます。

そこで今日は、卒業する皆さんへ、目標についての話をしたいと思います。目標には複数の種類があります。今日は四種類の目標を紹介します。

第一の目標は、行動を始める時点で見えている具体的な目標です。これは行動を始める時点で目指すことができる目標です。例えば運動会や音楽発表会といった学校行事がこの目標になります。この目標の特徴は、最初に目標が見えているので、次にこの目標を目指して行動を始めることができるという、目標から行動へという順番になる点にあります。この場合は、計画が立てやすく、行動しやすくなります。

第二の目標は、目標と行動の順番が第一の目標とは逆になります。先に行動があり、次に行動の中から目標が見えてくるという順番になります。目標には、行動を始める時点で見えている目標と、行動を始める時点では見えていないけれど、途中から次第に見えてくる目標があります。第二の目標では、目標は見えないけれど、まずやらねばならない行動を先に始めます。すると行動を続けるうちに次第に具体的な目標が見えてきます。たとえば掃除をしなければならないとします。まず掃除という行動を始めます。この時点では具体的な目標は見えないかもしれません。しかし掃除を続けるうちに、「ぞうきん」や「ほうき」はどう使えばよいか、掃除を忘れやすい場所はどこか、ゴミがたまりやすい場所はどこか、といった掃除を行う際の具体的な目標が見えてきます。したがって行動を始める時点で目標が見える、見えないにこだわる必要はありません。まずやるべき行動を始めましょう。具体的な目標は行動の中からおのずと見えてきます。

次に第三の目標です。第三の目標は、物事の価値、あるいはよさを理解するという目標です。たとえば皆さんは道德の授業で「自由って何だろう」「本当の友情って何だろう」という「学習のめあて」を考えてきました。このときの「学習のめあて」が第三の目標です。この「学習のめあて」は、自由や友情の「価値」や「よさ」を理解するという目標です。このとき道德の授業で学習した考え方を、他の同じ種類のテーマに当てはめて考えることが大切です。例えば今年度はコロナの影響で学校がお休みになりました。その時皆さんは「学校に通うよさは何だろう」「教室で先生や友達と一緒に勉強するよさは何だろう」といった学校で学ぶ価値やよさを考えたことでしょうか。これが第三の目標で、物事の価値を理解するという目標です。他に同じ種類のテーマとして、「生きる意味って何だろう?」、「人間の幸せって何だろう?」といったテーマがあります。これらは立ち止まって、

自分を見つめ直す時の原点になる働きをしている目標です。これから皆さんが中学生、高校生、大学生、そして社会人になってからも、折に触れてこの目標に立ち返ってください。

最後に第四の目標です。この目標は一つの時代が終わって、振り返った時にはじめて自分が達成したことを実感できる目標です。「自分が成し遂げてきたことは、こういうことだったのだ」ということを、一つの時代が終わってはじめて実感できる目標です。この目標は行動を始める時には見えません。行動を続けている時にも意識はされません。例えば、皆さんにとっては今日が、小学生という一つの時代が終わる日になります。皆さんは卒業記念文集に、自分の小学生時代を振り返って、自分が成し遂げてきたこと、身に付いたことをたくさん書いてくれました。皆さんが卒業記念文集に書いてくれた内容がこの第四の目標です。これらのことは小学校に入学した時には見えなかった目標ですし、小学生時代も意識していなかった目標だったと思います。この目標は、一つの時代が終わって振り返った時にはじめて、達成したことを実感できる目標です。

以上に紹介した目標は、行動を始める時に見えている目標、行動を続ける中で初めて見えてくる目標、物事の価値やよさを理解するという目標、今までの自分を振り返った時にはじめて達成したことがわかる目標、の四種類でした。

これらの目標はそれぞれ別々のものではなく、お互いにつながりあっています。例えば第二の目標から第一の目標が生まれるかもしれません。第三の目標から第二の目標が生まれ、さらに第一の目標が見えてくるかもしれません。

このように目標と行動の間には、目標が行動を育て、行動が目標を育てるという、お互いに影響を与え合っている関係にあることがわかります。したがって、たとえ目標が見えなくなった状況になったとしても、行動を始める時点で目標が見える、見えないにこだわる必要はありません。

これから先、目標を見失いそうになった時、あるいは何を指したらよいかわからなくなり、目指す方向に迷った時には、この四種類の目標を思い出してください。どの目標が今の自分にふさわしいのかを考えてみてください。必ず「今、自分がやるべきこと」「今の自分が目指すべきことがら」が見つかります。以上で卒業される皆さんへの私からの言葉といたします。

5. 令和3年度(2021年度) 2022年3月18日

主題：偶然と必然、自由と不自由

本日、鹿児島大学教育学部附属小学校令和3年度第71回卒業式を挙行できますことを心から嬉しく思います。そして只今、卒業生の皆さんに卒業証書を授与いたしました。卒業、おめでとうございます。保護者の皆さまにおかれましては、お子様のご卒業を心からお喜び申し上げます。

これまで皆さんの学校生活は、コロナ対策のために普段と異なる内容になりました。皆さんは六年生として、ルールをしっかりと守り、下の学年の子たちに模範を示すことができました。六年生として附属小学校をしっかりと支えてくれました。とてもりっぱでした。

これから新しい門出を迎える皆さんに、コロナ対策の生活を例にとりながら、偶然と必然、自由

と不自由についての話をいたします。

コロナ対策の中での生活は、皆さんにとっては小学校高学年の時期に出会った偶然の出来事です。そしてこうした生活をせざるを得なくなったということは、自分の力ではどうすることもできない現実です。

このことは、実はコロナ対策に限った話ではありません。同じ例はたくさんあります。人間は皆、自分の力ではどうすることもできない現実の中で生きています。例えば、自分が生まれた時代、生まれた国や場所、民族、また病気や事故、といった現実自分ではどうすることもできません。これらは学校の宿題やクラスにもあてはまります。これらは自分に与えられた現実です。しかも偶然です。この時期にコロナに出会ったことも自分に与えられた現実です。これも偶然です。また自分の力ではどうすることもできないという意味で不自由です。

与えられた現実を変えることはできません。しかも与えられた現実、自分に原因があるわけではない偶然です。したがって、自分に与えられた現実「どうして自分がこんな目に会わなければならないのか」と不平や不満を抱くことがあるでしょう。ふてくされたり、すねたり、いじけたりすることもあるでしょう。こうした姿は自分の現実押しつぶされた姿です。

大切なことは、自分の力ではどうしようもない、偶然与えられた現実をどのように意味づけ、その現実と臨むかです。自分の力ではどうしようもなく、偶然与えられた現実の不自由でしょう。しかし、その現実をどう意味づけるかに私達の自由があります。積極的に意味づけることもできるでしょう。不平不満をもらして消極的に意味づけることもできるでしょう。フランクフルトという20世紀の心理学者は、「現実をどのように意味づけるかは私達の自由であり、私達に委ねられている。ここに人間の価値がある」と述べています。自由と不自由の関係については、三谷隆正という20世紀の日本の哲学者が次のように述べます。「不自由な生活の中から自由という意識が生まれる。最初からすべてが自由であれば、自由という意識は生まれない」。不自由な体験のなから自由という意識が生まれます。またヘーゲルという19世紀のドイツの哲学者は、「不自由を体験して初めて、自由に溺れることなく自分の力で自由をコントロールする力が育つ」と述べました。コロナ対策の中での不自由な日々は、皆さんにとっては「自由とは何か」を考えるよい機会であったと言えます。

そして人間の価値は、この現実の中で自分はどんな工夫ができるか、そして何を学ぶことができるかを考えるところにあります。たとえば、学校行事という特別な出来事だけではなく、友達との会話や授業といった普通の日常を大切にしようと考えた人もいるかもしれませんね。

校長先生は、皆さんが校門の前で朝の掃除をととても頑張っている姿が印象に残っています。自分が何を頑張るかは人から与えてもらうのではなく、自分で見つけるものだ、ということを読んでくれたのかもしれません。思い通りにいかなかった時の気持ちの整理の仕方を学んだ人もいないかもしれませんね。

さらに、コロナを経験した今の自分と経験しなかった自分とを比べてみてください。コロナを経験したからこそ考えたことがある。コロナを経験したからこそ見えたものがある。このことは、コ

コロナを経験しなければ今の自分にはなれなかったことを意味します。これは小学校5, 6年でコロナを経験したという偶然が, コロナを経験したからこそ今の自分になることができたという必然に変わったことを意味します。偶然与えられたコロナという経験によって, 必然的に今の自分が作られたのです。自分の力ではどうしようもない偶然を自分の力で必然に変えていったのです。これが生きる営みです。

これはコロナに限らず, 将来の皆さんの仕事も同じです。どんな仕事をさせられるかは自分で決めることはできません。この仕事が自分に与えられたのは偶然である。しかし, 今の自分になるためには偶然与えられたこの仕事を経験しなければならなかった。この仕事だったからこそ今の自分がある。偶然与えられた仕事によって必然的に今の自分がつくられたのだ。

これを, 偶然を必然に変える力と呼びましょう。これからの人生でこうした力を身につけてください。すなわち, 与えられた経験は偶然であっても, この経験があったからこそ今の自分がある, と将来言えるように今を過ごす。すべての経験を自分の力で必然に変えていく力です。

今の皆さんは, 偶然を必然に変えるよい機会を経験したと言えます。最後にニーチェという19世紀のドイツの哲学者の言葉を皆さんに送ります。「偶然という運命に押しつぶされることなく, 自分の運命の上に立ちましょう」。この言葉を皆さんに送ります。

Ⅲ. 卒業文集

1. 平成29年度(2017年度)卒業文集

主題: 自分らしさって何だろう

六年生の皆さん, ご卒業おめでとうございます。これから皆さんは, 進学し, そして将来の自分の職業について考える機会も多くなるでしょう。そんなときに, 皆さんはおそらく, 自分らしさを発揮できる職業に就きたいと思うかもしれません。そこで卒業していく皆さんに, これから考えていただきたいこととして, 自分らしさを取り上げてみることにしましょう。

自分らしさというと, どんなイメージがしますか。自分にしかできないこと, 人と違った自分の独自性, 自分の興味, 関心といったイメージがあるかもしれません。したがって自分らしさを発揮できる職業とは, 自分にしかできないこと, 自分の独自性を生かせる職業ということになると思います。

そこで皆さんは, 今の自分らしさを考えてみてください。自分らしさがすぐに思い浮かぶ人や, 自分らしさが思い浮かばない人もいます。

実は自分らしさには二種類あるのです。一つ目の自分らしさは, 生まれつき自分が持っている才能です。スポーツや絵が得意であるといった, 生まれつきもっている才能です。

二つ目の自分らしさは, 生まれた後の学習によって身に付く独自性です。学習によって身に付く独自性は, 今の皆さんにはまだわからないかもしれません。なぜなら学習によって身に付く独自性は, これから皆さんが長い時間をかけて見つけていくものだからです。

今、自分らしさが思い浮かばない場合は、学習によって身に付く独自性を探していけばよいのです。そして学習によって身に付く独自性は、自分でも気が付かない場合が多いのです。したがって学習によって身に付く独自性を探す際に最も重要なことは、何かに取り組む際、興味がないからといって食わず嫌いをしないことです。今、興味がないからといって食わず嫌いをすると、自分の可能性を自分で狭めてしまうことになります。自分の独自性を生かせる可能性はどんな分野に潜んでいるかはわかりません。

学習によって身に付く独自性を探すためには、どんな分野にでも積極的に取り組むことです。そして取り組む際には、できるだけ創意工夫をしてみましょう。実は独自性というのは、取り組み方や進め方に現れるのです。

皆さんには、これからの長い人生のなかで、ぜひ学習によって身に付く独自性、学習によって身に付く自分らしさを見つけ出してほしいと思います。

2. 平成30年度（2018年度）卒業文集

主題：自分で目標を見つける力を身に付けよう

卒業おめでとうございます。皆さんは、これから新しい学びの世界に入っていきます。その学びのなかで皆さんは、目標を目指すという経験を数多くしていくことでしょう。そこで卒業に際して、皆さんに、目標についての話をしてみます。

実は目標には二種類あります。一つは他者から与えられる目標です。もう一つは自分で見つける目標です。これまでは、先生が皆さんに目標を与えてくださったかもしれません。したがって皆さんは、他者から与えられる目標を目指してきたと言えます。これからは皆さんに、ぜひ自分で目標を見つけてほしいと考えます。

なぜなら、他者から与えられた目標は、行き止まりの目標になることが多いのです。行き止まりの目標は、なぜその目標が設定され、なぜ自分がその目標を目指す必要があるのかがわからないままです。したがって、学びに納得感が得られず、閉塞感が生まれ、意欲が減退し、長続きしなくなる可能性があります。中学、高校に進むと学びに納得感が生まれてはじめて意欲が湧くのです。

一方で、自分で見つけた目標は、自分がその目標を目指すしなければならない必要性がわかっているので、学びに納得感が生まれ、長続きします。さらに、目標に近づいたら、次の新しい目標を自分で設定することができます。あるいは学びの途中で目標の修正を行うことが可能です。こうした活動を行うことで、自分で自分の学びを組み立て、深めていくことができるようになります。

学びを自分で組み立て、深めていく力が身に付くと、他者から教えてもらわなくても、新しい分野を自分一人学んでいくことができます。

自分で自分の目標を見つける過程を考えてみます。まず「なりたい自分」はどんな自分か、そして「なりたい自分」になるためには「今の自分」に何が不足しているのかを考えます。次に「今の自分」は何をすべきかを考え、実行する必要があります。この過程が自律性です。

自分で目標を見つけ、その目標に照らして常に自分を見つめながら行動することによって、自律性の力が身に付くのです。自律性の力は、将来皆さんが社会で活躍していくために不可欠な力です。

自分で見つけた目標を目指し、「今の自分」から「なりたい自分」へと常に自分を更新していく姿勢を、心理学で「自律的動機づけ」と呼びます。皆さんには、ぜひ「自律的動機づけ」の姿勢を身に付け、自分で自分を成長させていってほしいと願っています。

3. 令和元年度（2019年度）卒業文集

主題：精神的回復力を身に付けよう

卒業おめでとうございます。皆さんはこれから中学に進学します。中学に入ると、友達関係が広がり、勉強や部活、生徒会等、取り組む活動が増えてきます。それに伴い、物事が順調に進んだり、進まなかったりする時もあるでしょう。もし順調に進まなかった時に、傷ついてしまうことがあるかもしれません。

傷ついてしまった時に、立ち直す道筋について話をします。私が専門とする心理学に精神的回復力という言葉があります。精神的回復力はつらい体験をした時の落ち込みから立ち直る力であり、困難な出来事を克服し、その経験を自己の成長の糧とする力です。また精神的回復力は、心のバランスを失わず、平常心を保つ力でもあります。そこで以下に精神的回復力を身に付けるための三つの活動を紹介します。

第一は、じっとしていないで行動することです。傷ついたからといって、同じ場所にじっとしていることがないようにしましょう。悩むことはよいことです。しかし、何もしないで悩むのではなく、行動しながら悩みましょう。

第二は、物事の見方を変えるという活動をしてみるということです。物事を肯定的に見る場合もあれば、否定的に見てしまう場合もあるでしょう。物事を否定的に見てしまうと、気持ちも後ろ向きになってしまいますね。否定的な見方になってしまう時は、自然と否定的な見方になってしまうわけではありません。自分が否定的な見方を選んでいるだけなのです。

自分が否定的な見方を選んでいるだけなのであれば、物事を肯定的に見る練習をすればよいのです。どんな物事にも、良い面と悪い面の両方があります。良い面を考える練習をしてみましょう。

第三に、悩み事は一人で抱え込まないということです。自分の周囲にいる大人に相談して、悩みを共有してもらいましょう。自分が不安定になっている時には、大人の安定さで自分を抱えてもらうことが必要です。

傷つく経験を恐れてはいけません。傷つく経験の意味は「傷ついたけれど立ち直ることができた」、「傷ついたけれど、大丈夫だった」という経験を自分がもつところにあります。

これから皆さんが進む中学と高校では、思うようにいかないことも多くなるでしょう。けれどこれらの経験はこれから皆さんが社会で生きていくためには必要な経験です。皆さんにはぜひ、傷つきを自分自身の糧とする力を身に付けてほしいと思います。

4. 令和2年度（2020年度）卒業文集

主題 悩みと不安を抱える力を身に付けよう・ネガティブ・ケイパビリティ

卒業おめでとうございます。今年度は、「悩みと不安を抱える力を身に付けよう」をテーマに、ネガティブ・ケイパビリティという概念を紹介します。ケイパビリティとは、問題の処理や解決の能力をさします。ネガティブ・ケイパビリティとは、もともと十九世紀の英国の詩人、ジョン・キーツが提唱した概念です。この概念の意味は、「すぐには答えの出ない状態を受け止め、その状態を耐え抜く力」あるいは、「いつまで続くかわからない困難な状態に耐え抜く力」になります。

今年度の私たちの暮らしは、まさにこのネガティブ・ケイパビリティが求められる状態だったと言えます。

そもそも物事の答えには二種類あります。「すぐにわかる答え」と「すぐにはわからない答え」です。すぐに答えや結果がわかる状態というのは、人間に強い快感をもたらします。典型的な例がギャンブルです。だから人間はギャンブルに熱中しやすいのです。一方で、すぐには答えや結果がわからない状態は人間にとって苦痛なのです。そして社会には、すぐにはわからない答えや結果が多いのです。

卒業生の皆さんは、これからすぐにはわからない答えや結果と向かい合う機会が増えていくことでしょう。例えば、日々の勉強です。勉強の成果は、すぐに目に見える形で現れるわけではありません。すぐに成果や結果が出ない状態に耐えながら継続しなければなりません。またクラブ活動の練習にも同じことがあてはまります。特定の目標に向かって毎日を送るためには、ネガティブ・ケイパビリティが不可欠なのです。

同時にネガティブ・ケイパビリティは、価値観が多様化し、正解がわかりにくい現代社会においてますます必要になる力だと言えます。こうした社会では、簡単に答えや結果が見つからない場合が多いのです。そんな時に、わからない状態にじっと耐え、悩みながらあきらめずに地道に取り組む姿勢が求められるのです。

何か問題が生じた時に、すぐに即効的な解決策を求めるのではなく、根本に立ち戻ってみる姿勢、あるいは問いの立て方自体を見直してみる姿勢、粘り強く繰り返す姿勢が大切です。そしてその間の、答えや結果が出ない状態を耐え抜くのです。途中経過を飛ばしてすぐに答えばかりを求めてはいけません。

ネガティブ・ケイパビリティは、卒業生の皆さんにぜひ身に付けてほしい力です。これからの長い人生、早急に答えを求めず、しっかり悩みと不安を抱えていきましょう。

5. 令和3年度（2021年度）卒業文集

主題：知識と学び、そして自由

卒業おめでとうございます。皆さんの卒業に際し、学びと自由の関係についての話をいたします。この話は、私たちはなぜ勉強しなければならないのか、という内容につながります。

私たちは、学びによって多くの知識を得ることができます。ここで知識の役割について考えてみましょう。知識は私たちに何をもたらしてくれるのか、という問題です。皆さんが学校で学んでいる知識は、誰かが勝手に作り上げたものではありません。皆さんが学んでいる知識は、過去に生じた出来事や事象が整理され、体系化されたものです。こうした知識を身に付けることによって、皆さんは世の中の出来事を自分で意味づけ、解釈することができるようになります。それでは次に、知識の役割を具体的に見ていくことにしましょう。

まず、過去に生じた出来事は、将来も再び起こりうることを確認しておきましょう。ここから知識が私たちに何をもたらしてくれるのかが明確になります。

第一に、知識があれば、将来の予測が可能になります。今後の展開を見立てることができるようになるのです。第二に、知識によって将来の予測が可能になれば、計画を立てることができるようになります。今後、どう行動すればよいかがわかるようになるのです。第三に、知識は私たちの予測と計画に、根拠と妥当性をもたらしてくれます。この予測と計画でよいかが自分でわかるようになります。以上の三点が知識の役割になります。

このように知識は私たちに、予測性、計画性、予測と計画の根拠と妥当性をもたらしてくれます。そして、私たちは知識がもつこの三点の役割によってはじめて、自分で判断することができるようになります。すなわち、自分の判断を拠り所に行動することができるようになるのです。これが自由です。したがって知識がなければ、いつまでも他人の判断を仰がなければならなくなります。どう行動してよいかを自分で判断できないからです。これは、とても不自由なことです。

以上述べてきたことが、学ぶことの意味です。学びによって知識を得る。そして知識を得ることによってはじめて、私たちは物事を自分自身の力で判断して、自由に動くことができるようになります。自由とは、自分の好きなように行動してよいという意味ではありません。これから小学校を卒業していく皆さんには、ぜひ学びを通して、自分自身の判断を拠り所に自由に行動できる大人になってほしいと思います。

IV. 会議での指導助言 (2021 年 4 月以降分)

2021 年 3 月までの会議での指導助言は本論文シリーズのⅢに掲載している。

2021 年 4 月 1 日 職員会議 指導助言

主題：対になった概念について・二元論

本日は二元論と呼ばれる対になった概念について話をいたします。世の中には対になっている概念が非常に多いと言えます。たとえば理想と現実、清と濁、強さと弱さ、愛と憎しみ、知性と情動、有限と無限、身体と心、あるいは聖域と俗域です。このように物事を二つの対立概念を通して捉えることを二元論と言います。二者択一の発想です。

こうした二元論、二者択一の発想は実はとても単純な発想です。二元論は物事を白と黒に単純に割り切ってしまう発想です。物事を白と黒に単純に割り切ってしまうと多くの事柄を見落としてし

まいます。

一見対立しているように見える概念は、実は決して対立してはいないことを指摘したのは、ニーチェという哲学者です。一見対立しているように見える概念は本当に対立しているのか、もし対立していないのであればどんな関係になっているのか、という視点が必要であることを指摘しました。

例えば弱さと強さの関係はどうでしょう。弱さを乗り越えて強くなるのか、強くなるためには弱さを否定しなければならないのか。一方が他方を乗り越えろとか、否定するといった発想は対立という前提に立っています。

清い世界と濁った世界という清と濁はどんな関係にあるでしょう。理想と現実はどうでしょう。現実を否定して理想の世界だけに生きることは可能でしょうか。一方で、理想がない世界とはどんな世界なのでしょう。

一見対立しているように見える概念には、一方から他方が生まれたというケースがよく見られます。例えば現実を知ることから理想が生まれるのではないのでしょうか。

なぜ対立しているように見えるかという、二つの対立概念に価値の違いを見出しているからです。もし二つの対立概念はともに同じ価値をもつのだと考えてみたらどうでしょう。

毎日の仕事においては、理想と現実、清と濁、強さと弱さ、公と私、善と悪、聖域と俗域といった、一見対立しているように見える二元論の世界と直面していかなければならないと思います。

決して二元論という単純で一面的な見方ではなく、一見対立しているように見える二つの世界を割り切ることなく、お互いが他方はどう生かされているのか、一方は他方にとってどんな意味があるのか、という両者の関係性を考慮すると見える風景が違って見えると思います。

2022年1月6日 職員朝会 指導助言

主題：私を支える三つの価値の物差し

新年にあたりまして、私が好きな人生を表現する言葉を紹介させていただきます。人生を表現する言葉はたくさんありますが、私が好きな言葉は、「人生は七味とうがらし」という言葉です。聞いたことありますか。七味なので、七つの「み」があります。一つ目がうらみ。二つ目がつらみ。三つ目がねたみ。四つ目がそねみ。五つ目がいやみ。六つ目がひがみ。七つ目がやっかみ。

これらは人間の性（さが）ですが、いずれも自分と他人を比較することから始まります。これらを自制できればいいですね。

では、自分と他人を比較せずに済むには、どうしたらよいかというと、自分を支える価値の物差しをもっておくことです。ここで大切なことは、自分を支える価値の物差しは一つでは不十分だということです。自分を支える価値の物差しが一つだけだったら、その価値の物差しが通用しない事態に出会ったときに、自分で自分を支えることができなくなります。

自分が一人で立っていくためには最低三つの足場が必要です。これと同じように自分で自分を支える足場としての価値の物差しを最低三つはもっておくとよいです。ちなみに私を支える三つの

足場としての価値の物差しは、第一にトラブルがあるのは順調にいつている証拠。第二に行動とは現実を変えること。現実が変われば気持ちも変わる。気持ちで気持ちを変えるよりも、行動を通して気持ちを変えた方が建設的です。第三に人間は意味を求める存在です。ただし、行動する前から意味を求めてはいけません。意味は行動した後、はじめてわかってくる。仕事をしていると「こんな仕事は意味があるのか」といった気持ちになることも多いですが、「できるだけ何か意味があるんだ、今はわからないだけだ」と思うことにしています。

2022年4月1日 職員朝会 指導助言

主題：集団の器、集団の吸収力、

新年度になり、先生方におかれましては、学級開き、学級経営といったお仕事が始まるかと思えます。そこで今日は、集団についての話をいたします。

各学校には、必ず「本校が目指す子どもの姿」があります。これと同じように学級集団についても、目指す学級集団の姿を描くことが可能です。集団には器があります。器が大きい集団と器が小さい集団があります。さらに安心できる集団と安心できない集団があります。

集団の器には集団の吸収力があります。集団の吸収力とは、集団の中でのトラブルやもめ事を自分達で解決し、自分達で事態を收拾し、収めていく力です。集団の吸収力とは集団の器です。集団の吸収力が弱くなっているときは集団の器が小さくなっている状態です。集団の器が小さくなると、集団の中でのトラブルやもめ事を自分達で解決できなくなります。最近では、高校生すら自分達のもめ事を自分達で解決できずに、先生に仲裁に入ってもらう状況です。

また恥や失敗が赦されない集団も器が小さい集団になります。恥や失敗が赦されない集団はとても苦しい集団になります。恥をかいたり、失敗できる集団は、恥や失敗を共有することができるので、安心できる集団になります。集団には、安心できる集団と安心できない（油断できない、スキを見せられない集団）があります。器の大きな集団は、安心できる集団であり、吸収力があり、懐が深い集団になります。

集団には、このように器が大きな集団、懐が深い集団、安心できる集団があります。先生が「どんな学級にしたいのか、どんな集団を目指しているのか」といったところを児童に伝えてあげると児童自身も自覚できるかと思えます。

2022年4月1日 運営委員会

主題：学校と家庭での児童の存在意義

最近では、どの学校でも保護者対応に悩まされています。そこで、PTAなどの機会に家庭と学校での児童の存在意義の違いについて保護者に話をさせていただくとよいかもしれません。

児童の存在意義は家庭と学校とでは異なります。家庭では、かけがえのないわが子です。一方、学校では、集団の中の一人です。したがって、児童の存在の意義が異なってきます。これは、家庭

と学校とでは、育つ力が異なることを意味します。

家庭では愛してもらうことによって、自他への信頼感、安定した人格が育ちます。一方、学校では、集団の中で揉まれることによって、人間関係をこなす力、思い通りにいかない事態に耐える力、秩序を守る力が育ちます。家庭では人間関係が単純になりやすいので、こうした力はどうしても集団体験が必要です。

したがって「学校でも家庭と同じようにわが子を扱え」といった保護者からの要求に応えることはできません。ただ残念ながら、この点を理解していない保護者が見受けられます。

また近年は、家庭の教育力が落ちていることもよく指摘されているところです。たとえば「先生、早く、箸の持ち方を教えてください」といった要望も見受けられます。本来「何をどこまで家庭で教育すべきなのか」という家庭で教育すべき部分と学校で教育すべき部分とを区別して考える必要があります。

また、当然ですが、子の成長にともなって親の愛し方も異なってきます。幼児期、児童期、思春期と子の成長にともなって親の愛し方は変わってきます。わが子の発達段階に応じた愛情の強さと種類が必要になります。わが子が児童期、思春期に入っても、乳幼児期と同じようにべったりした愛し方をする必要はありません。わが子の成長にともなって親も変わっていく必要があります。

わが子の成長と実態を考えた上で、わが子がどんな種類と強さの支援を必要としているのかを考える必要があります。幼児期、児童期、思春期と同じ種類と強さの愛情で包み込む必要はありません。こうしたところを保護者に伝えていただければと思います。

2022年7月29日 職員会議 指導助言

主題1：目標と目的

主題2：割り切れなさを抱える

① 目標と目的

自分探究クラブ（総合的学習の時間）のあり方についての議論があった。目標を明確にした方がよいという議論があった。ここでさらに、目標と目的を区別するとカリキュラムを考えやすくなると思われる。まず目標については以下のように捉える。それぞれのグループの目標としては、提案、普及、技術力の向上、作品の完成といった目標が挙げられる。

ここでさらに目標とは別に目的を考える。目的は、目標を達成するまでの過程で児童が身に付けるべきことがら、学ぶべきことがらになる。

このように「目標は達成することがら、目的は身に付けることがら、学ぶべきことがら」と分けて考えると、各グループのカリキュラムの内容を考えやすくなると思われる。

② 割り切れなさについて

コロナの影響が強くなり、最近も行事の変更や学級閉鎖が生じている。先生方におかれても、日常生活に支障をきたすなど、割り切れない思いを抱くことが多かったことと推察する。

そこで、割り切れなさについて話をしたい。何でも物事が白黒きれいに割り切れた方が、気持ちがいよいものである。しかし、世の中は複雑なので、きれいに割り切れることは生じにくい。

そこで、割り切れないことを割り切れないまま抱えていくことが大人であると考え。白黒割り切らないと気が済まないというのは幼稚なメンタリティーである。お互いに割り切れないことを割り切らないまま抱えていきましょう。

V. 2019年度公開研究会 全体論原案 2019年3月15日配布

—新たな価値を創り出す資質・能力とは— 文責・假屋園昭彦

主題：物差し、枠組み、価値

1. 「物差し」(枠組み)の意味と機能

(注) ここでの「物差し」とは、「枠組み」と同義である。

「物差し」とは、物事を理解する時に、「どこを見るのか、どこから見るのか」という物事を理解する時の規準あるいは視点のことです。「どこを見るのか」「どこから見るのか」という「物差し」が決まっていないと、何も見えてきませんし、表現することもできません。

「物差し」の例として次の質問を考えてみます。「ここから郵便局まではどのくらいありますか」という質問には、「ここから歩いて10分くらいです」という回答ができるし、「ここから1キロくらいです」という回答もできます。「歩いて10分」という回答は時間を「物差し」として使っています。「1キロ」という回答は距離を「物差し」として使っています。このことは、場所の移動や空間を理解する時に、私達が時間と距離という二つの「物差し」を使って見ていることを示します。

別の例として、物(例えば「かぼちゃ」)の特徴や性質を理解する時には、私たちは、どんな「物差し」を使っているかを考えましょう。算数では、体積や重さという「物差し」で物(かぼちゃ)の特徴を捉えるでしょう。同じ物(かぼちゃ)の特徴を理解する場合でも、図画工作では「暖かい色をしている」とか「変わった形をしている」というように色や形の「物差し」で理解するでしょう。算数と図画工作では、同じ物を理解する時でも、使う「物差し」が違うのです。教科が違うと、使う「物差し」が違ってきますね。

日本という国を理解する時も、歴史、地形、産業といった異なる「物差し」で見ることができません。同じ対象を理解する時も、異なる「物差し」を使うと違った姿に見えるのです。皆さんが、各教科で学んできた知識は、物事を見る時の「物差し」です。

【解説】：ここでの「物差し」は知識・技能に相当する。

他にもこんな「物差し」があります。例えばコップに水が半分入っているとします。これを違う「物差し」を使って捉えてみます。「積極的な物差し」を使うと「半分も入っている」という意味になります。しかし「消極的な物差し」を使うと「半分しか入っていない」という意味になります。使う「物差し」が違うと、コップ半分の水という事実から生まれる意味が変わってきます。このこ

とから物事の意味というのは、私達が使う「物差し」によって生まれることがわかります。

【解説】：「物差し」によって意味が生まれる。「物差し」には意味を創造する機能がある。使う「物差し」が異なると異なる意味が生まれる。「物差し」によって意味を創造する活動は思考・判断・表現に相当する。

「物差し」をたくさんもっておくと、同じ風景を見る場合でも、たくさんの事柄が見えてきます。しかし、もっている「物差し」が少ないと、同じ風景を見ても、少しの事柄しか見えてきません。人は自分がもっている「物差し」の範囲しか目に入らないからです。物事を多面的、多角的に見るというのは、たくさんの価値の「物差し」をもっているという意味です。物事を判断する時には、できるだけ多くの「物差し」を使うと、多面的、多角的に判断できます。その結果、物事を俯瞰的に捉えることが可能になり、広い視野に立った判断が可能になります。しかし、使う「物差し」が少ないと、視野が狭くなり、独断的で独善的な判断になってしまいます。

【解説】多くの「物差し」を使って、物事を多面的・多角的に捉える活動は、思考・判断・表現に相当する。

2. 価値

学びとは、物事を捉える時の「価値の物差し」が増えていくことです。「価値の物差し」とは何でしょう？たとえば、「音楽を勉強する前は、音楽の価値がわからなかった。しかし、音楽を勉強してからは、音楽の価値がわかってきた。」という場合の価値という言葉の意味は何でしょう？「音楽の価値が分かる」とは、単に「音楽が大切であることを知っている」という意味ではありません。「音楽の価値が分かる」とは、「音楽がどういう特徴や性質（←ここが知識・技能）をもっていて、なぜ音楽が大切なのかという、音楽が大切である理由、音楽の必要性を知っている」という意味です。

3. 学びに向かう力・人間性等と価値の創造

物事の価値がわかるためには、「物差し」をたくさんもっておく必要があります。「物差し」をたくさんもっていると、価値が見えてきます。自分にとっての価値が生まれます（←ここが価値の創造）。ここで重要なことは、学ぶ際に、自分が今もっている「物差し」だけでこの学習内容は価値がないと判断してはいけないということです。学習内容に価値がないのではなく、学習内容の価値がわかるための「物差し」を自分がもっていないだけです。世の中には、まだ自分が知らない、そして、これから学ぶべき「物差し」がたくさんあることを自覚する必要があります。自分が今もっている「物差し」がすべてだと思ってしまうと、その時点で学びが止まります（←ここが学びに向かう力）。学びとは、学ぶ前には、自分が存在すら知らなかった「物差し」を習得し、新たに習得した「物差し」で、学んでいる内容の価値がわかってくるという営みです。このことは学びによって、自分の中に価値がわかるための「物差し」すなわち「価値の物差し」が生まれてくることを示しています。したがって学びは「価値の創造」と呼ぶことができます（←ここが価値の創造）。

学びをとおして「音楽の価値がわからなかった自分」が「音楽の価値がわかる自分」へと変わっていきます。これは、自分の中に今まではもっていなかった「価値の物差し」が創り出されたこと

を意味します。学びとは、今までその価値がわからなかった学習内容の価値がわかってくる、自分の中に「価値の物差し」を創り上げていく、「価値の創造」の営みであると言えます。

現代社会は、複雑で、変化が速い。その社会のなかでは、既存の「物差し」では理解できない事柄や既存の「物差し」では対応できない現象が生じるでしょう。そのような事態に対応するためには、自分が今持っている「物差し」の範囲と限界を自覚し、新たな「物差し」の習得、既知の「物差し」の組み替え、再構築を行うことによって、自分自身の「価値の物差し」を創り出す必要があります。この作業によって「何が大切なのか、なぜ大切なのか」を見極める力が生まれます。これが新たな価値を創り上げ、見出す力です。

現代社会は複雑です。自分がもっている「価値の物差し」が少ないと、視界が狭くなり、単純な見方しかできなくなります。複雑さに耐えていくことができません。しかし「価値の物差し」をたくさんもっていると、複雑さのしくみがわかります。したがってその複雑さを抱えて、その複雑に耐えていくことができるようになります（←ここが人間性等）。

そして自分がもっている「価値の物差し」が多いということは、人間としての器が大きいということの意味します。俯瞰的で大局的な理解の仕方ができるようになります（←ここが人間性等）。

附属小学校では、こうした力を「新たな価値を創り出す資質・能力」と呼びます。そして、学校生活をとおしてこのような資質・能力をもった児童を育てていくことを目指します。

VI. 2018年7月26日 九州地区国立大学附属学校連盟 国語科部会 開会挨拶

主題：言葉と認識、二種類のコミュニケーション・スタイル

本日は、九州地区国立大学附属学校連盟国語科部会の開催を心よりお慶び申し上げます。本大会のように、教科や分野を同じくする附属学校の先生方が一堂に会し、研究内容の発表や報告を行うことは、附属学校同士の連携および各附属学校の研究の発展のために極めて重要であると考えます。

私の専門分野は心理学ですが、心理学の中でも、認知・学習心理学を研究領域としておりました。認知・学習心理学では、文章の理解過程、言語発達、思考と言語という領域は大きな柱であり、言語の分野は、私も昔から興味のある分野でありました。

ところで私は、心理学の立場から言葉を学ぶ意味を以下のように考えています。すなわち、言葉の豊かさがその人の世界の豊かさを決めます。言葉は外界の認識のあり方を規定し、世界の分類の仕方を規定します。したがって語彙が豊かであれば外界の細かい分類ができますが、語彙が乏しいと大雑把で単純な分類になります。したがって私たちに見える世界の風景は、世界を区分し、分類する言葉によって決まります。

このことは、言葉によって世界の見え方が違ってくることを意味します。私たちには、言葉として知っている対象だけが見えるのです。言葉として知らない対象は見えないし、対象として存在していないことと同じです。言葉に先立って対象が存在するのではなく、言葉が対象を作り出すのです。たとえば、日本には雨を表す言葉が多いことはよく知られています。私に氷雨が見えるのは、

私が氷雨という言葉を知っているからです。氷雨という言葉を知らなければ、たとえ目の前に氷雨が降っていても氷雨は見えません。

学びの醍醐味は、新しい言葉を学ぶことで、今まで見ていた風景や出来事が新しい風景や出来事として見えてくる点にあると言えます。その意味で言葉を学ぶということが学びの原点であると言えますでしょう。

また私は、心理学を専門としているので、小中学校で教育相談やカウンセリングの仕事をする機会がよくあります。最近、小中学校の先生方からの相談として多くなっているのが、児童生徒の言葉遣いが悪いという相談です。例えば、何かというときに「アホ、バカ、死ぬ」といった言葉が出てくるのです。これは語彙力が乏しいことと、このようなコミュニケーションの取り方しか知らないことが原因です。

児童生徒の語彙力、コミュニケーションの取り方（コミュニケーションスタイル）を育てるのは家庭の言語環境が大きな原因の一つだと考えます。家庭のコミュニケーションスタイルが語彙が乏しく、歪んだコミュニケーションスタイルであるならば、このコミュニケーションスタイルが児童生徒の言葉遣いにも大きく影響するでしょう。

イギリスの有名な教育社会学者であるバーンステインという人がコミュニケーションスタイルについて、言語コード論という考え方を出しています。簡単に紹介します。

思考は対話であり、したがって児童は、他者との対話に含まれるコミュニケーションスタイルを自分の中に取り込んで自分の思考スタイルを作ります。ここで対話に含まれるコミュニケーションスタイルには二種類あります。

一つは限定コードと呼ばれるコミュニケーションスタイルです。限定コードは「メシ、フロ、ネル」といった省略的で語彙が乏しく、単語を並べただけの論理を含まないコミュニケーションスタイルです。

もう一つは精密コードと呼ばれるコミュニケーションスタイルです。丁寧で論理と根拠の筋道を立てた、語彙が豊富な話し方です。

家庭の言語環境がこのどちらかによって子どものコミュニケーションスタイルが大きく変わってきます。家庭でのコミュニケーションスタイルが限定コードであれば、子どものコミュニケーションスタイルも限定コードになります。逆に精密コードであれば、子どもも精密コードでのコミュニケーションが可能になります。

子どもの言葉遣いには、家庭でのコミュニケーションスタイルが大きく影響していると考えます。先生方には保護者にぜひ、家庭での言語環境の重要性を伝えてほしいと思います。

また言葉は認知面だけではなく、人間のアイデンティティ、歴史と文化を形成する働きがあります。日本にも日本人のアイデンティティを創り上げてきたすばらしい文学、古文があります。子ども達にはぜひ、日本の文学や古文にも親しんでほしいと思います。人間の心は、各人が生活してきた文化を生きることによって成立し、文化のなかで育ちます。したがって私達の心のありようは、私達の

文化と言葉に規定されています。まさしく言葉は私達の人間の存在様式を規定する働きがあると言えます。

こうした意味で、国語は日本人の心のありようを形成する教科であり、また思考の発達を促進する教科であると言えます。

国語の先生方には、ぜひ児童生徒に言葉の魅力、人間にとっての言葉の役割を伝えていただくことを期待しております。

以上で挨拶とさせていただきます。

VII. 附属小学校 授業力アップ講座 道徳 指導助言

2017年10月21日

主題：評価，発問を経験することの意味，道徳的価値の意味を明らかにするための方法

【 評価について 何を、どのように評価するのか 】

・平成29(2017)年6月に出された学習指導要領解説の評価の章には、「学習状況や成長の様子を評価する。児童の学習状況は指導によって変わる。道徳科における児童の学習状況の把握と評価は～」との記載がある。すると「学習状況の把握と評価」という部分がキーワードになる。

・「学習状況」とは何か。学習活動の様子である。授業のなかで子ども達がどのように学んでいるのか、学んでいる様子や姿が学習状況なのである。評価ではこれらの変化を記述する。

・今日の授業であれば、「多様な道徳的価値観を表出する」。これが学習状況なのである。したがって「多様な道徳的価値観を表出できるようになりました」。これが学習状況の変化である。もちろん「発言はなかったけれど、45分間、しっかり先生や友達の話聞くことができた」「男の子が大切に考えたことを言えるようになった」。これらも学習状況なのである。

【 授業について 発問を経験することの意味 】

自分の暮らしに持ち帰ることができる発問（自分で自分に問いかけることができる自問自答型発問）を授業のなかで経験させる。発問が授業のなかだけで終わらないようにすることが肝要である。したがって授業での発問が、暮らしのなかの多くの場面で自分に問いかけることができる汎用性の高い自問自答型発問になっているかどうかポイントである。

【 道徳的価値の意味を明らかにするための方法 】

類似した概念（言葉、価値）同士を比べてみるとよい。今日の主題は「善悪の判断、自律、自由と責任」である。学習指導要領には「正しいと判断したことは、自信をもって行うこと」と記載されている。この記載から類似した概念同士の比較を試みてみよう。以下のような発問が考えられる。たとえば「自分にとって正しいとさえ判断できれば、独りよがりになってもいいの」「自律って、自分が自分の判断に従うことでしょ。だったら、独りよがりと自律ってどっちがうの」「自律とは周りに流されないことなのでしょ？すると『周りに流されないこと』と『独りよがり』ってどう違うの」「『周りに流されない』ためには、周りを見捨てればいいじゃないの」。これらの問いを考えていく

と、この授業の最初の「めあて」である「正しいことを行うとは、どういうことだろう？」に迫り着く。

道徳的価値というのは、必ず「誰にとっての」という視点が必要になる。したがって「正しさ」を考える場合でも必ず「誰にとっての正しさなのか」という視点が必要になる。

【 授業の主題について：善悪の判断，自律，自由と責任 】

学習指導要領には、「ここを目指せ」という人間像が書いてある。「目指すべき人間像」が記載してある。しかし、どのようにして「目指すべき人間像」に迫り着くのかは記載していない。学習指導要領に記載している「正しいと判断したことは自信をもって行うことができる人間」とは、目指すべき地点を意味する。目指すべき地点に到達するためにはどうしたらよいかを考えるのが授業なのである。

具体的に考えてみる。「正しいと判断したことは自信をもって行うことができる」ためにはどうしたらよいかを考える。そのためには「自分の判断に自信をもつことができる」ことが必要である。

「自分の判断に自信がなければ、周囲に左右される」のである。そして「自分の判断に自信をもってはじめて自分を律することができる」のである。では、どうしたら自分の判断に自信をもつことができるようになるのだろうか。自分に自信をもつことである。自分に自信をもつことができれば、自分の判断にも自信をもてるであろう。ではどうすれば自分に自信をもつことができるであろうか。どんな経験をすれば「目指すべき人間」になれるのか。どんな生活をおくれば「目指すべき人間」になれるのか。このように、具体的に降ろして順序を踏みながら考えていくと、問うべき発問と授業展開が見えてくる。

2022年2月5日

主題1：過ちを犯さないようにするための道徳，過ちを犯してしまった後の道徳

主題2：具象，抽象，具象の過程

① 相手のことを考える視点と自分のことを考える視点の二種類がある。

相手のことを考える視点は、相手の気持ちや立場を考えることです。こちらの方は思いつきやすい視点です。思いつきにくいのは自分のことを考える視点です。「自分にも悪いところがあったのではないか」、「自分には落ち度はなかったのか」、という視点です。

今日の例では「けんか」でした。「けんか」をしないようにするためには、相手のことを考えればよいことになります。これは「過ちを犯さないようにするための道徳」になります。同時に、人間は過ちを犯してしまう存在です。「けんか」をしてしまった後、過ちを犯してしまった後、自分を振り返る力、反省する力が必要です。これが自分のことを考える視点です。

現在、先生方から、児童の振り返る力が弱い。振り返りが浅い、という声を多く聞きます。振り返る視点とは、「自分に悪いところはなかったか、自分に落ち度はなかったのかを考え、反省し、どうすればいいのか、」を考える視点です。

過ちについて考えてみると、道徳には二種類の視点があることがわかります。すなわち、「過ちを犯さないようにする道徳」および「過ちを犯してしまった後の道徳」という視点です。この二種類の視点を扱うことによって、児童には、自分の日常を振り返る力、反省する力が育つのではないかと考えられます。

② 抽象化の過程が必要

道徳の授業の特徴として抽象化の過程が必要である点が挙げられます。読み物はあくまでも具体例です。その具体例を抽象化して、道徳的価値を析出しなければなりません。授業では、具体例としての読み物から道徳的価値を抽象化できるかどうかのポイントであり、難しいところになります。

次に具体例としての読み物を抽象化し、道徳的価値を析出した後、再び、抽象化した道徳的価値を、自分の生活という具体例に降ろす過程が必要です。

道徳の授業では、具象、抽象、具象のサイクルを意識する必要があります。

VIII. 文献について

文献は「参考文献」という形で示す。本論文のシリーズ（ⅠからⅢ）は、卒業式の式辞、文集、会議の指導助言、挨拶原稿、原案、といった性質上、厳密な引用形式をとらなかった。しかし本稿は、先述のように心理学、哲学、倫理学の理論を土台にして作成した。

特に留意されたいのは、本稿の内容は理論をそのまま紹介したのではなく、筆者自身の考えも交えて作成しているという点である。児童、教師、保護者に伝わりやすいように、学校場面に当てはめて考えることができるように、筆者自身の考えも交えて作成した。したがって理論の内容は、多少、改変されている点があることを明記しておきたい。

これらの点を踏まえて、以下に、参考とした文献を示す。特に内田樹先生の書籍からは多くのご教示をいただいた。

参考文献

源了圓（編）（1992） 型と日本文化 創文社

木田元 （2001） 偶然性と運命 岩波書店

小松光彦・樽井正義・谷寿美（編）（2006） 倫理学案内 慶應義塾大学出版会

宮原浩二郎 （2010） ニーチェ 運命を味方にする力 PHP 研究所

フリードリッヒ・ニーチェ （1995） ツァラトゥストラはこう言った 氷上英廣（訳） ワイド版岩波文庫 岩波書店

新田孝彦 （2000） 入門講義 倫理学の視座 世界思想社

大庭健 （2012） いのちの倫理 ナカニシヤ出版

関根清三（編）（1999） 死生観と生命倫理 東京大学出版会

篠澤和久・馬淵浩二（編）（2010）倫理学の地図 ナカニシヤ出版

内田樹 （2002a）「おじさん」的思考 晶文社

内田樹 （2002a）期間限定の思考 晶文社

内田樹 （2007）下流志向 講談社

内田樹 （2008）昭和のエートス バジリコ株式会社

山内志朗 （2007）〈 つまずき 〉のなかの哲学 日本放送協会出版

山内志朗 （2018）目的なき人生を生きる 角川新書 KADOKAWA